ノーヒットノーラン

柳川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ノーヒットノーラン

【Ｎコード】
Ｎ８９７７Ｄ

【作者名】
柳川

【あらすじ】
家庭の事情で田舎の親戚の家に住み込み、中学に通うようになった瀬川悠太はクラスメートや野球仲間を通して成長していく。そんな平凡な日常を書いてみました。

第一話

『次は早鐘橋です』

運転手の低い声がバスの中に響いた。マイクを通しての声は余計に低く聞こえる。少年は不安を感じながら降車ボタンに手をかけた。もう、何年ぶりだろうか。大きな窓から見える深緑の山々も、ガードレールの下に点在する鮮やかな菜の花も、舗装されてない道をガタガタと小刻に揺れながら進んでいくバスの感覚も憶えのないものだった。ボタンを押し停車の合図が告げられたが、本当にそこで良かったのかわかるはずもない。

ひたすら前を見ていると小さなプレハブの屋根の下に錆び付いたバス停の標識がたっているのが目にはいってきた。その横を流れる川に架る橋を少年は思い出した。確に、ここで間違いない。そう安心した時、ふと懐かしさがこみあげてきた。バスの黒ずんだ手摺も、色褪せた座席も全てひっくるめて懐かしいような気分に駆られた。

バスが停車して腰を上げ、立とうとした時、先に通路を挟んで隣に座っていた女性が席をたった。その方へ少年は一瞥を投げた。

整った顔付きのショートカットの女性はとても美しかった。一見、華美な女性の印象を持ったが、二重瞼で一点を見つめる凛とした目や真一文字に結んだ口はどこか寂しい感じがする。その女性に続いて、少年はバスを後にした。バスの運転手の『ありがとうございました。』という声はほとんど耳に入っていなかった。バスがぎこちない音をたてながら、遠のいていくのを見送るより先にプレハブの小屋の中にある古びたベンチに荷物を降ろし、女性が歩いて行った方を見た。

これから自分がどのようにして親戚の家まで行けば良いのかわからなかったが、自分の行き先より、女性の行き先の方が気になった。ハイヒールと地面がぶつかりあうコツッ、コツッという音に少年は

酔い痴れながら、スカートを棚引かせ、橋を渡っていく女性の後ろ姿をいつまでも、いつまでも見守っていた。

第二話

親戚の家に着いた時には既に辺りは薄暗く、夜の爽やかな暖かさに包まれていた。迷わず押した呼び鈴の音は軽快に聞こえた。昼間の女性のせいなのだろうか、これからの生活への期待なのだろうか。

「悠ちゃん、よく来たねえ。大変だったでしょう。」

叔母の真智子は目を細め、眉間にしわをよせながら言った。悠ちゃんと言われた少年は真智子に簡単に挨拶をした後、二階の部屋に案内されベッドに腰を降ろした。

そして持ってきたバックのチャックを開け、手を奥まで入れ、そっとグローブを取り出した。そのグローブには瀬川悠太と黒のペンで書いてある。その消えかかった部分をゆっくり人指し指でなぞりながら、離れ離れの家族――今の自分に欠けているものについて感傷に浸っていた。

ふと、下から晩御飯だから降りておいでと言う声が聞こえ悠太は立ち上がった。グローブを机の上に置き、部屋を出てドアを閉める。この机もベッドも真智子が息子の使い古しだけどと言って貸してくれたものだが、そんなちょっとした気遣いが悠太にはたまらなく嬉しかった。食事の席に着くと、テーブルの上にある肉じゃがに目がいった。

「悠ちゃん昔から肉じゃが好きだったでしょう。」

真智子が確かめるように聞いた。

「はいっ」

悠太は元気に返事をしたあと、どうぞという真智子の声を待って肉じゃがを口にした。しっかり味のついた肉の旨味とともに、懐かしさが口の中いっぱいに広がった。
叔父の正幸と真智子と悠太の三人の食卓は初めてでありどこかぎこちない感じで丸テーブルを囲んでいたが、二人の優しさに自然と打ち解けていった。正座をしていた悠太はいつの間にかあぐらをかき、二人と笑顔で話をし、部屋へ戻った。暫く荷物の整理をし、一段落してベッドに横になると、悠太はハンガーに架けてある制服に目をやった。東京にいる仲間とは同じ制服を着ることも、同じユニフォームを着ることもできないが悲嘆な感情にはならなかった。あるいは気概で紛らわしているだけかもしれないが、悠太がこの地に来たことを後悔してないことは確かである。そんなことを考えているうちに、瞼が重くなるのを感じ、目を閉じた。

どのくらいの時間がたっただろうか、悠太は窓からさしこんでくる光で目を覚ました。ほどよい気温の清々しい朝である。
顔を洗い、制服に着替え、朝食もそこそこに真智子にいってきますと告げ、家を出た。靴のかかとを踏んだまま慌ただしく駆けていく。時間に余裕があることを悠太は分かっていたがじっとしていられなかった。

家から学校まで歩いて三十分、そのちょうど真ん中に位置するのが、あのバス停のある早鐘橋である。そこに差し掛かった時、横を振り向くと、橋の上を歩く女性が目にはいった。あの時の女性だった。正面から女性を見て、スッと通った鼻筋など改めてその容姿の端麗なところを実感した。
悠太が通う中学校の制服と同じものであり驚いたが、一年生のバッチを付けていることに悠太はさらに面食らった。あの時は容姿だけでなくキリッとした目付きからも年上の女性なのだと思い込んでいたからだ。ただやはり、そのもの寂しそうな印象は拭えなかった。

どことなく重苦しい感じ――これが大人びて見える原因なのかもしれない。普通の中学生とは違うものを背負っているような。
悠太はその女性と目を合わせることなく通りすぎた。風向きは追い風なのだが、異様な重厚感があり、足取りは重くなる一方だった。
木々の葉が風にじっと耐えているのを悠太はじっと見送った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8977d/

ノーヒットノーラン

2010年10月10日05時57分発行